



沖縄近代史・琉球王国から沖縄県へ
甘いけど、苦い。
近代沖縄と黒糖

(第3講 2021年12月18日)

担当：前田 勇樹
(琉球大学附属図書館)

第1回：「琉球王国と『琉球処分』①」

→ 「琉球処分」前史／19世紀の東アジア国際関係の変化

第2回：「琉球王国と『琉球処分』②」

→ 「琉球処分」とは？／「琉球」はいつから「沖縄県」に？

第3回：「甘いけど、苦い。近代沖縄と黒糖」

→ 近代沖縄を襲った大不況「ソテツ地獄」

第4回：「「同化」をめぐる近現代の沖縄」

→ 沖縄にとって「日本人になる」ことの意味とは？

沖縄、依存経済の系譜

◎近代 ……糖業



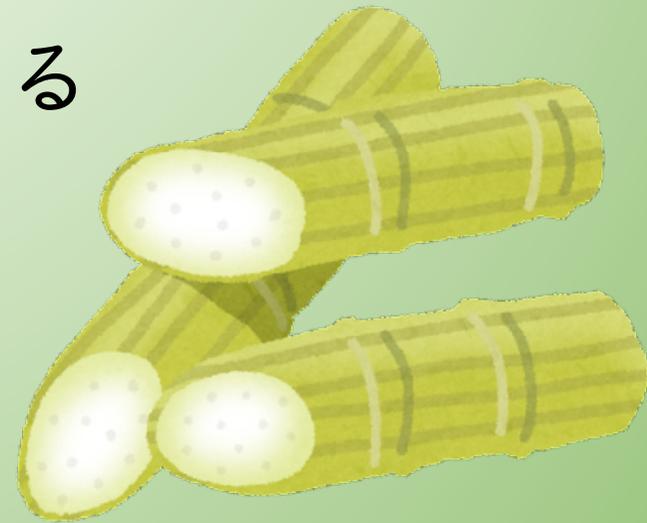
◎戦後米軍統治期 ……基地経済

◎復帰後 ……観光業



近世の南西諸島と黒糖

- 15世紀ごろ琉球に伝播
→ 1600年代初頭に本格的な生産と専売制に
- 黒糖→薩摩から借銀→中国貿易を経済的に支える
- 砂糖前代：製造前の黒糖をカタにした前借金
- 甘蔗作付制限
→ 王国時代は沖縄島の限られた地域、限られた生産量



旧慣温存と黒糖

- 「旧慣温存」とは？
 - 王国時代の制度や慣習を基本的にはそのまま活用
 - 教育や医療衛生など一部は改廃が繰り返される。
- 県当局は糖業を重視（日本国内に大きな需要）
 - 1885年 久米島で県の指導による開墾とサトウキビ栽培
 - 1888年 「甘蔗作付制限の解除」 → 宮古・八重山でも解禁
 - ⇒ 基幹産業となる反面、移入依存や食料不足の記録も…

砂糖をめぐる沖縄と台湾

- 近代沖縄糖業の特徴：「農工未分離」

→生産者（農民）が製糖（加工）までおこなう。零細な経営。

- 状況変化①：日本国内の砂糖をめぐる環境の変化（1895年ごろ）

原料糖（分蜜糖）を輸入して、国内の工場で精製する方法へ変化

- 状況変化②：台湾領有

台湾：原料糖の主要な生産地へ

総督府の糖業振興／大型工場建設

⇒領有から10年あまりで生産量は飛躍的に増大

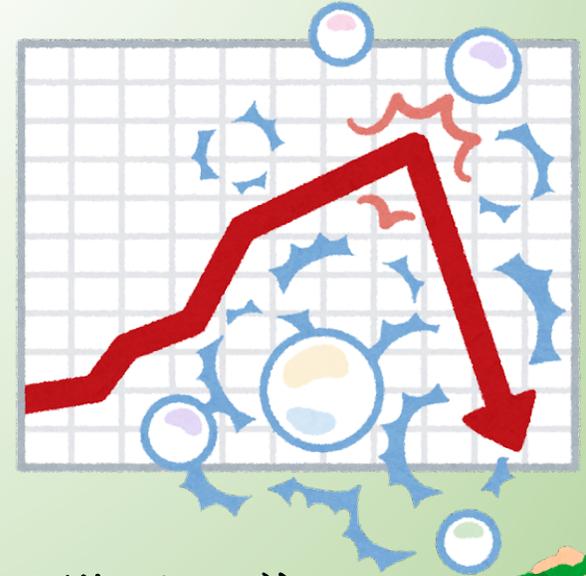




「No.17 Sugar Mill in Loo Chooan Village(琉球の村の製糖場)」
琉球大学附属図書館「ブルー文庫」

バブルから「ソテツ地獄」へ

- 第一次世界大戦（1914～1919年）
→ 沖縄に空前の「砂糖バブル」
- 終戦後、1920年をピークに糖価の大暴落
+ 世界恐慌のあおり（1930年代）
⇒ 一転して大不況の時代へ突入（～沖縄戦まで）
「ソテツ地獄」（救荒作物のソテツで飢えをしのぐ？）
- 身売りと移民の増加
農村から男子の「糸満売り」、女子の「辻売り」
関西や関東への出稼ぎ、植民地（台湾、南洋群島）や海外へ移民



眉屋私記文学碑

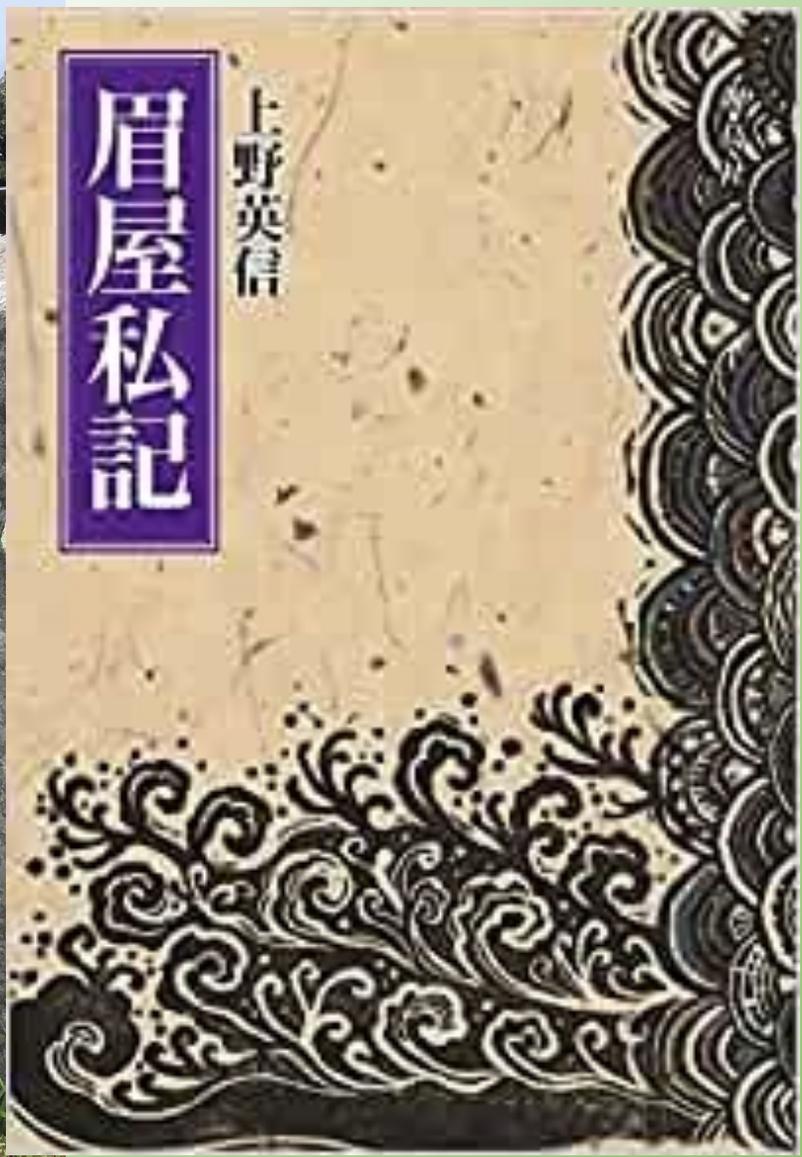


眉屋私記文学碑
眉の清らさ
神の島
英信

二〇二一年三月
眉屋私記文学碑建立期成会

上野英信「眉屋私記」文学碑
の記述文字者 上野英信（一九二二—
一九八七）が沖繩を主題から取り上げた
作品である。都立書「眉屋」の山崎
一雄の移住と先住の近代沖繩を
迎える「こゝろ」で、沖繩民衆のく
まひを嘆息した。
メキシコを旅した。同地やオ
ハイ、離れを逃れ、一九八〇革命でオ
ハイ、離れ、二度故郷の土を踏むこと
に、五男、島家（一八八八—一九五七）と
三雄を亡くす。故郷の娘をオハイ、
（一九五七—二〇〇六）の人生を
物事は皆を離れる。
ニールソンで、眉屋、渡邊屋地に
沖繩民衆を生まるる。も記述文字者
島内外有数の字に、建立する。
二〇二一年三月
眉屋私記文学碑建立期成会

"La Historia Personal de Mayuya" (Mayuya Shiki) es una obra que trata frontalmente sobre Okinawa y fue escrita por Eishin Ueno, escritor conocido por su novela documental sobre los mineros en Chikushu, Kyushu. En esta obra, Ueno trata sobre dos temas que calzan en el fondo del Okinawa moderno, reflejando con vigor la fortaleza del pueblo okinawense. Uno es sobre la emigración de "Mayuya", apodo del hijo mayor de la familia Yamano, del pueblo de Yabu, y el otro es sobre la trata de mujeres que era llamada "Tsujuri".
Manei Yamano (1888-1959), hijo mayor de la familia Mayuya, emigra a México como minero en 1907, donde se encontró con la Revolución Mexicana pero fue liberado justo cuando estaba a punto de ser fusilado. En 1916, huyendo del peligro, viaja a Cuba y consigue empleo como chef en la Embajada de Alemania en La Habana. Allí conoce y se casa con Elizabeth, una alemana que trabaja con él en la embajada, y así nace su hijo, María. Al estallar la Segunda Guerra Mundial, Manei es encarcelado en el campo de concentración de la Isla de Pinos (Isla de la Juventud) y al terminar la guerra, fue liberado. Manei falleció en 1959, el mismo año en que se produjo la Revolución Cubana. Manei nunca pudo regresar a Okinawa.
Pero aquí no termina la historia de la familia Mayuya. Manei tuvo una hermana menor llamada Tsuru (1905-2006). Tsuru fue entrenada en el barrio Tsuji donde aprendió a tocar shamisen, un instrumento musical de Okinawa. Ella viajó a su hijo y sus nietos emigraron varias veces: primero a Alemania y por último a Miami, EE.UU. En 1989, María, la hija de Manei, y su hijo Elio, visitaron Okinawa y tuvieron un encuentro dramático con Tsuru. Desde ese momento, la historia de la familia Mayuya da la vuelta al mundo.
Aquí, en las tierras de Tawaya, Yabu, origen de la familia Mayuya, erigimos este monumento a las vidas del pueblo de Okinawa gracias a la colaboración de voluntarios dentro y fuera de Okinawa.
Asociación para la Construcción del Monumento Mayuyashiki
Erigido en Marzo de 2021



「救済」と「振興」のはじまり

- 1920～30年代 「沖縄救済論」（湧上聾人、伊波普猷など）

課題：砂糖依存/移入超過/国税支出の超過/土地が狭い/
県民意識の改善

解決策：海外移民/産業構造の改善/国税負担の軽減

- 1932年「沖縄県振興一五年計画」

→道路整備、産業基盤の整備などインフラ面を重視

→満州事変以降、形骸化（執行予算は50%以下）

⇒沖縄の振興・開発は戦後へと持ち越される。

ここから見えてくることは？

- 疲弊する沖縄 — 発展する「台湾」
- 経済不況 → 県外での生活が生命線となる
⇔ 「言語矯正」や「風俗改良」の経済的動機
- 沖縄の「依存経済」「振興」「開発」の歴史のはじまり